

マイケル・ライス、ロジャー・ストローハン著

「自然な」ことはいったい何なのだろう？。そもそも、都市に住んでエアコンを使い、病気になれば抗生物質を飲んでおし、飛行機でどこかにバカンスにでかける生活が自然なわけではない。

私たちが毎日買われて食べている食品の多くも、もうずいぶん「自然」からかけ離れてしまっている。化学肥料や農薬を使わない野菜などが「自然食品」として売られるようになったのは、もう昔のこと。現代の「非自然食品」の主役は、遺伝子組み換えされた野菜やホルモン投与の家畜、人工授精に頼らねばならないように人工的に作り変えられた、もう絶対に自らの繁殖行動で繁殖することはできないシチメンチョウなどのバイオ食品である。

本書は、このような遺伝子組み換え食品や、医薬品開発などのための遺伝子操作では本当に何が行われているのかを概観し、その是非を、安全面、倫理面、経済面などから多角的に検討したものである。たいへんにおもしろく、そして深い考察がされている。語の口

評者・長谷川眞理子

是非を多角的検討 自己矛盾の内省を

は軽妙で、滑稽で、滑稽で、ツボをたまえた漫画の挿絵や、くだれもが議論について引き込まれてしまわぬように、

遺伝子組み換え食品については、日本ではあまり議論が活発でないように思える。しかし、この問題は、単に安全性の問題だけではない。人工的な生殖医療や臓器移植の問題と根は同じで、人間の生命と他の生命との関係をどうとらえるかの話なのだ。それゆえ、宗教の話もたくさん出てくるが、決して押しつけがましい議論でなく、どこかよい。「ライスとストローハンの結論」という項目で著者の意見がまとめられている。

最近、授業の一環で学生をいっしょにツバメの観察をしているが、多くの駅では、ツバメの糞巣を嫌って巣をこわしている。毎夏日本にやってくる鳥の存在さえも許容できない現代人は、バイオテクでできたトマトを食べながら、「自然に帰る」ことを夢見ているのだろうか？ 自分たちのご都合主義と自己矛盾に気づき、科学と人間の欲望について内省するため、ぜひおすすしたい一冊である。(専修大教授)



(白楽ロックビル訳、共立出版・258頁・2,800円)
Michael Reiss 英国の生物学者。
Roger Straughan 英国の倫理哲学者。